

生物シリーズ

1 年中繁殖できる

キジバト

Oriental Turtle Dove (*Streptopelia orientalis*)

姫路科学館 学芸・普及担当 徳重哲哉

■キジバト¹

キジバトはユーラシア大陸東部と日本に分布する、ハト目ハト科の鳥です。日本では、本州以南で留鳥^{りゅうちょう}（一年中同じ地域で生活し、季節による移動（渡り）をしない鳥の総称）または漂鳥^{ひょうちょう}（留鳥ではあるが、国内で繁殖地と越冬地を変え、小規模の季節移動をする種）、北海道では夏鳥です。農耕地、市街地、河川敷を含む平地から山地の林に多く見られます。雄雌同色で、成鳥は頭部から背、胸から下がぶどう色を帯びた灰褐色、頸^{くび}の側面に紺色と青灰色のしま模様があり、翼は黒褐色の羽が茶色に縁取られ、鱗^{うろこ}のように見えます（写真1）。この鱗模様がキジのメスに似ていることからキジバトと呼ばれます。主に植物の種子を食べますが、ミミズや昆虫類なども食べる雑食性です。



写真1 キジバト
2020年5月20日、自宅窓から。

キジバトの他に見られるドバトは家畜化されたカワラバト *Columba livia* が野生化したものです。ドバトの羽色は様々ですが、頸に緑と紫の光沢があり、キジバトと見間違えることはありません。また、ドバトは群れていることが多いですが、キジバトは基本的には単独か番^{つがい}で行動します。

■1 年中繁殖できるキジバト

日本で繁殖する鳥類の多くは春から夏に繁殖します。これはタンパク源となるチョウやガの幼虫が増えるのに合わせていると考えられます²。ところが、キジバトは特定の繁殖期を持たず、条件が整えば1年を通じて繁殖できます。親バトは採取した餌をそのままヒナに与えるのではなく、食道の一部が肥大した「そのう」で作られる、脂肪分とタンパク質に富んだそのう乳（ハト類ではピジョンミルク）を与えるため、昆虫の幼虫に頼る必要がないからです。

ピジョンミルクはそのうで分泌されるものではありません。抱卵期にそのうの壁が厚くなって乳状物質が多量にたまり、ふ化後に上皮組織ごと脱落し口に送られます³。ピジョンミルクは哺乳類の乳とは異なり、乳糖およびカゼイン（乳タンパクの主成分）を含まず、タンパク質はそのう上皮細胞組織由来です。また、オスのそのうでもピジョンミルクができるため、オスとメスが交互にヒナに給餌します。

¹ 真木広造、大西敏一、五百澤日丸、『決定版 日本の野鳥 650』、平凡社（2014 年）

² 和田岳、ピジョンミルクが繁殖期を広げる、in 『動物たちの地球』、第6 巻、p. 260-263、朝日新聞社（1991 年）

³ 内田清之助、『最新日本鳥類図説』、p. 27-28 講談社（1974 年）

■キジバトの営巣未遂事件（2020 年）

2020 年 5 月に、自宅アパートのベランダや中庭にキジバトが頻繁に出没しました（写真 1）。小枝をくわえていた時もあり（写真 2）、隣室のベランダか雨戸シャッターのケース上に巣を作ろうとしていたようです。隣人は糞害などを嫌い、数日かけて追い払いました。野鳥の卵は種類を問わず「鳥獣の保護および管理並びに狩猟の適正化に関する法律」（鳥獣保護法）第 8 条により、採取又は損傷できません。巣を作って産卵されてしまうと勝手に撤去できなくなるので、巣を作る前に追い払うのは正解です。ところが、後日、我が家の放置していた植木鉢を見ると卵がありました（写真 3）。狙われていたのは我が家だったのでしょうか。キジバトは木の上に巣を作るものだと思っていたら、専門書には「山地の雑木林・松林等の樹上か地上に枯枝で浅い粗雑な巣を造る⁴」（原文ママ）とありました。一つの巣を造るのには大量の枯れ枝が必要です。枯れ草が覆う植木鉢は、枝を集めなくても済む、手頃な「地上」だったのかもしれません。なお、キジバトは白色の卵を 2 個産むとのことですが、産み落とされていたのは 1 個だけでした。



写真 2 枝をくわえたキジバト

2020 年 5 月 18 日、隣室ベランダの手すりに止まったところ。



写真 3 キジバトの卵
2020 年 6 月 2 日、自宅ベランダの植木鉢に産卵。

■キジバトの子育て観察記（2021 年）

2021 年にキジバトが、窓から見える中庭のケヤキの木に巣を作りました。枯れ枝をくわえて枝葉の影に入る姿を何度も見かけたので、枝葉の隙間を双眼鏡で探ると、巣がありました。近づき過ぎると巣を放棄することがあるので、室内から望遠レンズで撮影することにしました。

9 月 5 日に巣で動かない親鳥を確認し、9 月 9 日には親が体を浮かせた時に白い卵が見えました。9 月 11 日に初めてヒナの姿が確認できました（写真 4 の矢印の先）。ヒナは体温を保つ柔らかい綿羽に覆われています。12 日に卵が 1 個残っているのが写っており、14 日までは卵が確認できましたが、その後は見えなくなりました。ヒナの方は順調に成長し、9 月 28 日夕方に、巣からいなくなりました。



写真 4 2021 年のヒナ
2021 年 9 月 11 日撮影

■キジバトの子育て観察記（2023 年）

キジバトが 2023 年にも同じケヤキの木に巣をつくりました。キジバトは同じ巣を再利用することがありますが、2023 年の巣は 2021 年とは違う場所でした。2021 年とは違うペアなのかもしれません。

8 月 15 日に卵が 2 個見え、23 日にはヒナを 1 羽確認しました。25 日には綿羽に覆われたヒナが 2 羽いました。28 日には綿羽が薄くなり、翼の鱗模様が目立つようになりました（写真 5）。9 月 1 日に綿羽がほぼなくなり、2 日には巣の中で立ち上がり、3 日には羽ばたく姿も見られました。6 日には巣から姿が見えなくなりましたが、9 日にはきょうだいで柵に止まる姿が見られ、10 日と 13 日には巣に戻っていました。地面で餌を探すようになると、遠目には親鳥と見分けがつきにくくなるため、巣に戻らなくなると観察終了です。

ケヤキの葉が落ちると巣が見えますが、毎年、こっそり子育てしているのでしょうか？ 気になります。

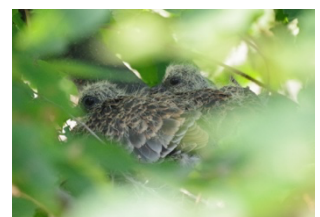


写真 5 2023 年のヒナ
2023 年 8 月 28 日撮影

⁴ 内田清之助、前出、p. 132